

群 教 七	G10 - 01
	令 2.275 集
	道徳

道徳的価値の自覚を深め 生活に生かそうとする児童の育成

—自分のこととして考えを深める話し合い活動の工夫を通して—

特別研修員 齋藤 こそ恵

I 研究テーマ設定の理由

小学校学習指導要領解説「特別な教科 道徳編」において、道徳教育を通じて、様々な状況の中で「自分はどうすべきか」「自分に何ができるか」などについて判断できるよう授業の改善が求められている。また、群馬県教育委員会作成による「はじめよう！道徳科」においては、道徳科の授業の中で「表面的な発言や記述に留まる」ことが課題点として指摘されている。実際の道徳科の授業においても、発言に消極的な児童や、表面的な言葉を使った短い言葉だけの記述に留まる児童の様子が見られる。

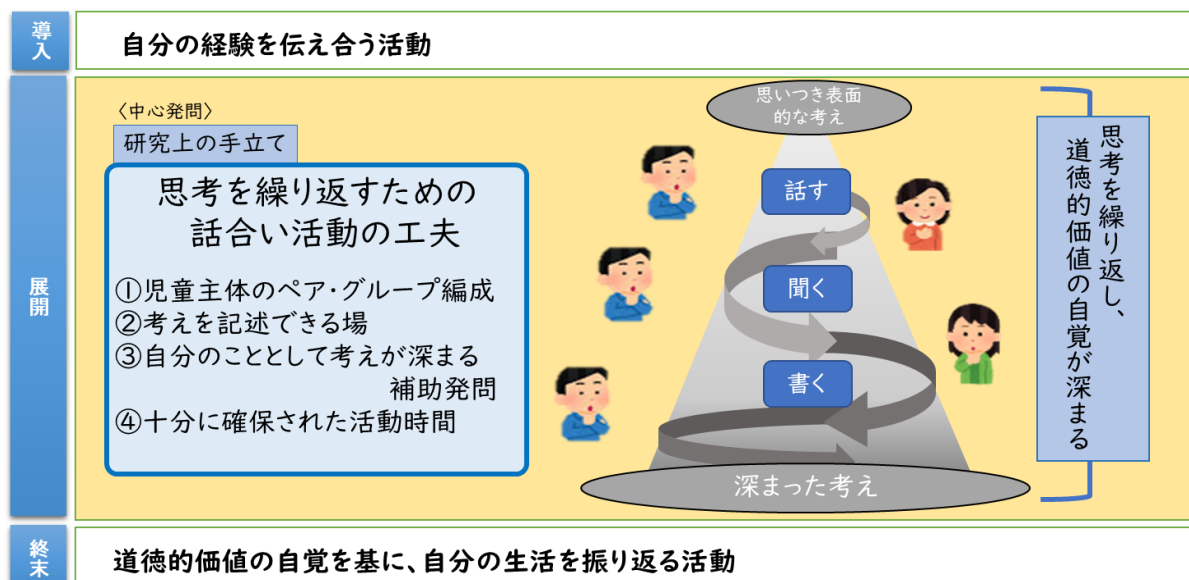
これらのことは、道徳科の授業において児童の道徳的価値の自覚が深まっていないためであると考えられる。このような児童が、道徳的価値の自覚を深めるためには、道徳的な課題に対して自分のこととして考えを深めることが必要である。そこで、授業の中で児童が道徳的な課題について、率直な考えを積極的に友達と話し合い、思考を繰り返すことによって、自分のこととして考えを深めることができると考えた。

本研究では、児童が自分のこととして考えることにより、道徳的価値の自覚を深め、生活に生かそうとする児童の育成につながると考え、本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図

- 児童の実態 ○発言に消極的な児童が多い。
○思いつきや表面的な考えにとどまる内容の記述が多い。



- 児童の変容 ○発言に積極的になり、全員が発言することができる
○自分の経験を振り返り、学習したことを生かそうとする記述が増える

目指す児童像

道徳的価値の自覚を深め、生活に生かそうとする児童

2 授業改善に向けた手立て

児童が道徳的な課題について自分のこととして考えを深めることができるよう、児童同士で「話す」「聞く」「書く」という行為を伴った思考を繰り返すことができる活動を設定する。児童主体で話し合う活動の時間を授業の中に十分に取り入れることは、教師に指名された児童を中心に、学級全体で話し合うよりも、個人の発話を促し思考を何度も繰り返すことができると考える。

手立て

(中心発問に対する) 思考を繰り返すための話し合い活動の工夫

- ①児童主体のペア・グループ編成をする。
- ②考えを記述する場を設定する。
- ③自分のこととして考えが深まる補助発問を行う。
- ④十分に確保された活動時間を設定する。

児童主体のペア・グループ編成をすることにより、中心発問に対する思いつきやまとまっていない考えでも伝えやすく、個人の発話量を増やすことができる。また、議論したいと思う友達とも主体的に話し合うことができる。さらに、話し合う内容や考えの深まりに合わせてペア・グループを再編成することができる。

児童は、中心発問に対する自分の考えを書くことにより、自分の考えを整理しまとめることができる。そのような考えを記述する場を設定することにより、自分や友達の考えが可視化され、改めて捉え直し、新たな考えへと深めていくことができる。

教師が机間支援をしながら、自分の生活を振り返ることを促す補助発問を行うことにより、児童が自分の経験を振り返り自分のこととして捉え直すことができる。

思考を繰り返す時間を十分に確保することにより、「話す」「聞く」「書く」という行為を伴った思考を何度も繰り返すことができる。このことにより、中心発問に対する思いつきや表面的な考えを、自分のこととして深めることができる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 思考を繰り返すための話し合い活動の工夫をしたことにより、発言が積極的になり個人の発話量が増え、全員が発言することができた。
- 話し合い活動において、「話す」「聞く」「書く」の思考を繰り返し、道徳的価値の自覚を深めたことで、終末における「道徳的価値の自覚を基に、自分の生活を振り返る活動」において、今までの自分の生活を振り返り、学習したことを生活の中で生かしたいとする、授業で深めた考えを実践の場とつなげて記述する児童が増えた。
- 道徳的な課題に対して、思考を繰り返し、自分のこととして考えを深められたことにより、道徳的価値の自覚を深めることができた。また、深まった自覚を基に、自分の生活を振り返ることで、生活に生かそうとする児童の育成につなげることができた。

2 課題

- ペア・グループの話し合いの様子を具体的に把握し全体共有の場で触れることができるよう、積極的な机間支援を行い、発言者と発言内容を記録するなどの手立てを講じる必要がある。

実践例

- 1 主題名 かたよらない心 内容項目 C- (13) (第6学年・2学期)
教材名 「森川君のうわさ」光文書院

2 本主題について

(1) ねらいとする道徳的価値について

本主題は、学習指導要領第5学年及び第6学年内容C-(13)公正、公平、社会正義「誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく、公正、公平な態度で接し、正義の実現に努めること」に基づくものである。人間は、それぞれ個性があり、違った価値観をもっている。それぞれが尊重されるべき人格であるが、ときに、相手によって態度を変えたり、自分の気分や好き嫌いで行動したりしてしまうことがある。だからこそ、そのような感情に目を向け、常に偏りはしないかと自己を見つめていくことが大切であると考え。そのような自分の感情を自覚したうえで、誰にでも公正、公平に接したいと願い、そのためにはどのように行動することが大切なのかを考え、実践しようと努力することが正義の実現につながっていくのではないかと考える。

(2) 児童の実態について

1学期を振り返った児童の作文には、「楽しくいいクラスでよかった」「みんな仲がよい」「新しい友達ができた」「友達との仲が深まった」といったクラスに対する肯定的な言葉が多く見られ、教室やクラスの友達に対して居心地のよさを感じている児童が多い。しかし、クラスの意見を集約する場面では、提案されている内容ではなく、発言者が誰なのかという点によって決めようとする児童も見られ、特定の児童の発言が支持される傾向がある。自分の考えではなく、好き嫌いや仲のよさが判断基準になってしまうことや、周りの雰囲気にならされてしまうことも多い。そのため、意見や考え方が違っても仲のよい友達の考えに同調する児童や、意見があってもその場では声に出さない児童も少なくない。本学習を通して、一部の考え方や情報をうのみにすることは偏った見方であり、そのことが自覚のないままいじめにつながってしまうことがあることに気付かせ、偏見やいじめのないクラスの実現に向け、意欲を高めたいと考える。

(3) 教材について

本資料では、主人公のクラスの「森川君」がささいな理由で仲間外れにあってしまう。仲間外れをする子供たちは、うわさ話に左右され明確な理由や自覚のないまま森川君を仲間外れにしていく。主人公は第三者の立場として他の児童同様に様子をうかがっているが、森川君を思う気持ちと自分を擁護し問題から目を背けようとする弱い気持ちとの間で葛藤していく。主人公の葛藤や心の変化を自らの体験と関連付けて見つめることを通して、常に正義を貫こうとすることは決して容易ではないことを自覚しつつ、どのように考え、対処しようとするかが大切なのかを考えられる教材であると考え。

3 本時及び具体化した手立てについて

〈手立て〉思考を繰り返すための話し合い活動の設定

①考えを発言しやすくし、発話量を増やすことができるよう、児童主体のペア・グループ編成をする。

児童が教室内を移動して話し合いたい相手を決めるように指示をする。ペア・グループが決められない児童に対しては、発問に対する考えを尋ね、似た考えのグループに入るよう促す。

②自分や友達の考えを可視化できるよう、考えを記述する場を設定する。

教室の数か所に模造紙とペンを置き、考えを記述する場を設定する。

③自分のこととして捉え直すことができるよう、机間支援をしながら補助発問を行う。

机間支援をしながら、ペア・グループの話し合いの内容を把握し、児童の経験を振り返ることができるような補助発問を行う。

④思考を繰り返すことができるよう、十分に確保された活動時間を設定する。

話し合い活動の時間を15分設定する。

4 授業の実際

導 入

導入では、うわさ話にまつわる自分の経験を伝え合う活動を行った。

始めに近くの友達と伝え合い、「仲のよい友達の話は、うわさでも信じてしまう」「うわさで嫌な思いをしたことがある」などの発言があった。

次に、3名が発表し、「秘密をばらされて嫌な思いをした」「嘘を流していることがある」「うわさが原因で、もめ事になった」などの発言があった。

クラス全員がうわさ話にまつわる自分の経験を伝え合う様子が見られたことから、本時の学習について自分のこととして意識付けすることができたと考える。

展 開

展開では、中心発問「このクラスではうわさ話に惑わされて仲間外れを起こさせないために、一人一人がどんなことを大切にしていればよかったですか」について、思考を繰り返すための話し合い活動を行った。

始めに、児童が教室を移動して話し合いたい相手を決めるように指示をした。児童は、いつも話をするグループになったり、近くの友達とペアになったりした。ペア・グループが決められない児童に対しては、教師が発問に対する考えを尋ね、似た考えのグループに入るよう促した。

机間支援をする中で、4名のグループの話し合いの様子は以下の通りである。

話し合いの前半では、中心発問に対する思いついたままの考えを気軽に伝えている。自分で話し合う相手を決定し、話し合い活動を始めているので、発言が活発であり発話量が増えている。さらに、「うわさはよくない」としながらも、「盛り上がる」と発言していることや、「自分がうわさされていたら嫌だ」という発言から、自分の経験を交えながら考え、自分のこととして捉えていることが分かる。また、話した言葉を整理してまとめ、模造紙に記述しながら話し合い活動が進んでいた。

「うわさは止める」という意見で話し合いが落ち着いたところに、机間支援に来た教師の補助発問が入った。すると、「止めればいい」と考えていたが、生活の中でできていないことに気が付き、その原因について考えを巡らせた。「本当は信じていないけれど、一緒にしないと仲間外れにされてしまう」という発言や同意する様子から、仲がいい子の意見に合わせなければ仲間外れにあってしまうという経験に基づく発言が見られ、話し合いで考えてきたことをさらに自分のこととして捉え直し考えることにつながっていた。その際、そこまで記



図1 話し合い活動の様子

(S:児童 T:教師)

S1:うわさはよくないよね。

S2:うわさを流さない。

S1:(友達の意見をうなずきながら聞き、考えを書く)

S3:でも、うわさ話って盛り上がるよね。

S1:うん、わかる。でも、自分が言われていたら嫌だな。

S2:そうだね。止める。間違っているかもしれないからうわさを止める。

T:うわさを止められないこともあるけれどなぜだろう。

S2:他の人に流されたのではないかな。

S1:本当は信じていないけど、一緒にしないと仲間外れにされてしまう。

S3:確かに。それで仲が悪くなったら嫌だね。

S1:勇気をもってとめる。

S4:でも勇気をもって、詳しく言わないと伝わらないかも。

S2:本人に確認が一番いい。

S1:冷静になる。

S3:落ち着くにしよう。

S2:うわさを言われている人の気持ちも考えたほうがいいと思う。

S1:周りに流されないで自分でもよく考えて、確かめたり、考えを伝えようとしたりすることも大切だね。

述してきた模造紙を見て振り返りながら話し合いを進めていたことから、考えを可視化したことが、捉え直すことや、新たな気づきを促すことに有効であったと考える。

また、話し合い活動の時間を15分確保したことにより、「話す」「聞く」「書く」といった行為を伴った思考が繰り返され、始めは「うわさはよくない、流さない」という表面的な考えだったものが、具体的にどのようにすることが大切なのかと自分の考えを導き出すことができ、自分のこととして考えを深めることができた。

なお、4名のグループは、15分間同じメンバーで話し合い、考えを深めていたが、その他のグループでは、他のグループの話し合い内容を聞きに行く児童や、2つのグループが合流し互いの話し合い内容について議論を交わす姿が見られ、ペア・グループを再編成することにより、話し合い活動が活発であった。



図2 児童が記述した様子

終末

終末では、話し合い活動で深まった考えを基に、自分の生活を振り返り、「公正公平なクラスにするためにはどんなことが大切か」について自分の考えをまとめ記述する活動を行った。

ワークシートへの記述には、「うわさに流されてしまっていた」と今までの経験を振り返りながら、「自分の意見をしっかり伝えたい」「本当なのかを確かめる」などと自分の考えに偏りが無いかを見つめ、正しいと思う行いを実践していきたいという記述が多くあった。

話し合い活動において自分のこととして考えを深めることができたことで生活に生かそうとする思いをもつことにつながったと考える。

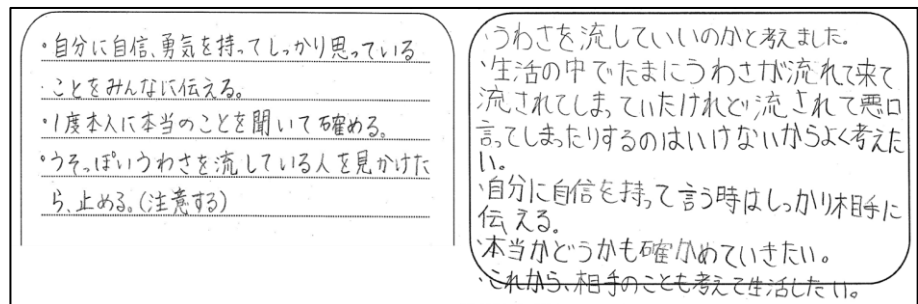


図3 振り返りの児童ワークシート

5 考察

児童主体のペア・グループ編成を行ったことにより、発言に消極的であった児童も、思いつきやまとまっていない考えでも安心して話せる相手と話し合うことができ個人の発話量を増やすことができた。また、話し合う内容や深まりに合わせて、ペア・グループを再編成できることで、自分の考えを繰り返し捉え直したり、新たな気づきが生まれたりしながら考えを深める姿が見られた。

考えを記述する場を設定したことにより、考えを書きながら整理することができた。また、考えが可視化されたことで、発言したことを振り返って捉え直したり、付け足したりしながら新たな考えへと深める姿がみられた。さらに、ペア・グループが再編成されていく中で、他のグループの話し合っていた内容を共有することができ、新しい気づきへとつなげることもできた。

教師が机間支援しながら補助発問を行ったことにより、自分の経験を基にして考えるよう促すことができ、自分のこととして考えを深める姿が見られた。

思考を繰り返す時間を十分に確保したことにより、思いきや表面的な考えが、友達考えに共感しながら、自分の言葉で言い換えてまとめたり、別の視点から発言したりと時間をかけながら考えが深まっていく姿が見られた。道徳的な課題の解決に向けて、児童が主体となって話し合う時間を十分に確保したことにより、指名された児童を中心とした話し合いよりも、児童一人一人が思考を何度も繰り返し、話し合う姿が見られた。

以上のような姿が多く見られたことは、思考を繰り返すための話し合い活動の工夫は、道徳的な課題に対して自分のこととして考えを深めることに有効であったと考える。